

# 遠赤外線外部加熱の体温上昇効果および同加熱乾燥のノニ・ウコン混合食品摂取者への効能

川角 浩 (かわすみ こう) 日本獣医生命科学大学応用生命科学部実験動物学教室講師博士 (医学)  
 松永 敦 (まつなが あつし) 大北メディカルクリニック 院長  
 鷲巢 誠 (わしず まこと) 日本獣医生命科学大学獣医学部獣医高度医療学教室 准教授 Ph.D.  
 廣瀬 治男 (ひろせ はるお) 日本工業大学 名誉教授 工学博士  
 清川 晋 (きよかわ しん) ナサコア(株) 代表取締役 ミサト中央研究所所長 工学博士

要約 9.8 $\mu\text{m}$  付近の遠赤外線を体全身に大量照射する装置を開発し、本装置による1日1回1時間程度の照射を2週間継続した結果、その被験者の平熱温度は35.1 $^{\circ}\text{C}$ から1 $^{\circ}\text{C}$ 以上上昇し、また血行改善、免疫力の向上、腸内細菌叢の改善などを伺わせる体調の変化を確認した。さらに数名の被験者からも冷え性の改善を始めとした体調の改善報告を受けた。本波長による常温下での急速減圧乾燥法により春ウコンを乾燥したところ、市販乾燥春ウコンに比べ3.7倍のATP活性を認めた。さらに本乾燥法により乾燥した春ウコンおよびノニのオレイン酸による抽出食品を開発し、ヒト耳鼻科領域で用いたところ、抗生物質治療では治し難い中耳炎3症例を完治させ、また副鼻腔炎1症例を含む多数の症例において症状の改善を認めた。上記装置と本食品を併用した被験者には、血行促進および、腸内細菌叢の改善効果をもたらす可能性が認められた。本波長による外部加熱は人、植物を問わず共有されるミトコンドリア活性を高めることによって、同様に細胞の代謝活性を上昇させることが示唆される。

## はじめに

「人間活動の全ては人間活動の為にある」と云えよう。その線に沿えば、あらゆる人間活動の様々な切り口によって行われる研究には無限とも云える多様性が存在し、また、人々の日々の営みは多方面の研究の課題を提供する。筆者らは、人間活動を支える人々の健康はそのホメオスタシス(恒常性)を基盤としており、それは、また、人間の熱機関としての機能や状態に大きく依存していると考えられる。さらには、個々の人たちは各々の環境下において様々な健康状態にありながら、ホメオスタシスにより、常に本来の良好な健康状態に戻ろうとする。その契機を与えようとする研究が進み、また、現代人はその成果を求めて止まない。この報告はそんな観点から行った遠赤外線加熱の応用に関するものである。

生物の体温と、神経系、内分泌系、免疫系機構との関係に関する研究は、多数の研究者により報告されてい

る。中でも安部は、低体温では交感神経の亢進に伴う免疫抑制が起こり易く<sup>1)</sup>、さらに西原は38-39 $^{\circ}\text{C}$ への体温上昇により、ガン細胞中のミトコンドリアは、形態及び機能を修復し、生体は自然治癒に向かうこと<sup>2)</sup>、石原は体を温めることによる薬に頼らない病気の治療法<sup>3)</sup>、さらに、石原と伊藤は、38.5 $^{\circ}\text{C}$ 付近までの加温により自然免疫を高める熱ストレス蛋白(ヒートショックプロテイン:HSP)が誘導され、傷ついた細胞の蛋白質を修復することなどを論じている<sup>4)</sup>。NASAはアポロ時代の「宇宙船内における人間の生存条件」の研究から、光と電波の境界に近く、コヒーレントでないため測定困難な8~15 $\mu\text{m}$ の波長領域は、生物の生存に欠かせないことを報告している。特に、水の吸収を含める、動植物の吸収波長(たとえば、3~12 $\mu\text{m}$ )の遠赤外線\*は、育成光線と呼ばれ、身体を活性化することが報告されている<sup>5)</sup>。

こうした遠赤外線に対する知見が集まる中、筆者らは9.8 $\mu\text{m}$ にピークを有する遠赤外線(図参照)照射の生体への効能を期待している。すなわち、波長9.8 $\mu\text{m}$